

植物としてのココヤシから

ココヤシとは、元来熱帯地方が原産地の植物です。現在の日本国内でも、沖縄などのような温暖な地域では、数多く自生してはいますが、結実することはほとんどないとされています。よって現在では日本国内では実を産出することはできず、全て海外からの輸入に頼っています。

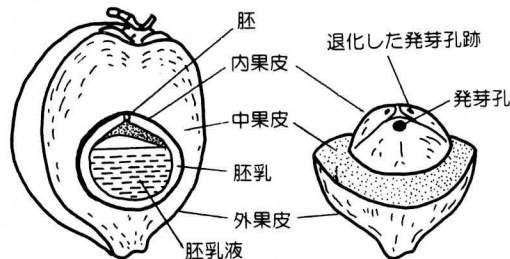
仮に、ココヤシ製の容器が出土した井戸が使われていた頃の日本列島の気候が、現在の気候とあまり変わらなかったのであれば、このココヤシの実は、日本列島以外の温暖な地域から、もたらされたものと推定することができます。

その経路としては、大きく二つの可能性が考えられるでしょう。ひとつは、熱帯からの海流に乗って自然に漂着したものが海浜に打ち上げられ、そして人に拾われた可能性があります。また一方では、海外地域との交易活動等により人為的に運ばれてきた可能性も考えられます。

今回出土したココヤシの実の体型を観察してみると、大きな特徴が見受けられます。それは、内果皮の高さと胴体の横幅の寸法とを比較すると、高さの方が大きいことです。現在世界各地に普及している品種は、今回出土したものと異なり、高さと同体の横幅が概ね同じサイズになっています。つまり、球形に近い体型をしていて、今回の出土物とは大きく異なった形をしています。

植物学的には、今回出土した実は「先祖種」として考えられており、かつてはヤシ種の主流を占めていたとされています。ところが、大航海時代が到来し、ヤシの実を船に積んで中の胚乳液を飲み水代わりに利用することが盛んに行われた結果、しだいに比較的多量の水分を含むタイプのヤシの実が好まれるようになりました。そして、そうした品種が人の手によって選抜されて、プランテーション農業で栽培されるようになった結果、現在の品種が世界中に普及することになりました。一方で先祖種とされる長細い形の実の品種は、今では極めて少なくなってしまったのです。

ココヤシ製品の実例から 本品の類例としては、正倉院南倉に収められている宝物の中はかなり類似した形態の品があります。ただし、正倉院



ココヤシ果実の形態と名称 模式図
(杉村順夫ほか著『ココヤシの恵み』裳華房1998 より転載)

宝物の例では、ココヤシ内果皮の上面を人面に見立てた加工・装飾が施してあります。すなわち、元々ある発芽孔を広げて容器の孔とした部分を口とし、また残りの二箇所の退化発芽孔の痕跡を目の部分として見立てて、墨等で目玉の模様を描き入れています。

このような装飾は、時代・地域を問わず、ココヤシの実を利用した加工品に時折みられるものなのですが、今回の出土品についてはそのようなレイアウト上の意匠工夫をした様子があまり見受けられません。口を広げる際に、人面を想定してバランス良く加工しようとした意図が見受けられず、また孔の加工状況も正倉院宝物に比べるとやや稚拙です。さらには、他の二つの退化発芽孔に墨などで装飾を施した痕跡についても、確認できませんでした。

なお、ココヤシの実や、それを用いた製品は、全国各地で数例の出土例が報告されています。古くは縄文時代や弥生時代の遺跡から出土したものもありますが、そのほとんどの例は形状的には先祖種の体型をしており、前述のような植物学上の説を裏付ける結果ともなっています。

今回出土したココヤシ製容器は、平安京に遷都した後とはいえ、まだ多くの生活者が居たと推定される9世紀前半の平城京の宅地跡で使用されたと考えられます。この製品の素材であるココヤシの実が、果たしてどのような経路をたどってもたらされたのかは定かではありませんが、古代の都市において、ココヤシの実か、あるいは製品が稀少なりとも流通し利用されていた可能性を示唆するものであり、極めて貴重かつ興味深い資料として位置付けられます。